

SHOW HEY シネマールム

★★★★★

ザ・コア (THE CORE)

配給/ギャガ・ヒューマックス共同配給

2003 (平成15) 年6月8日鑑賞

Data

監督: ジョン・アミエル

出演: アーロン・エッカート/ヒラ

リー・スワンク/デルロイ・

リンドー/スタンリー・トゥ

ッチ/DJ・クオールズ/リ

チャード・ジェンキンス

👁️👁️ みどころ

地球上の磁場は地球の外核における「対流運動」が生み出している。この「対流運動」が止まったら……。そんな「サイエンス・フィクション映画」を、地球滅亡の危機に立ち向かうプロフェッショナルたちが熱演している。筋書きはわかっている、つい興奮……。

＜コア (CORE) とは、磁場とは＞

コア (CORE) とは核、すなわち物体の中核のこと。それも地球の中核である内核 (Inner Core) を指した言葉だ。

「地球は丸い」。今は常識になっているこの科学的真実を発見するのに、人類はどれほどの苦勞をしてきたことか……。

そして、今「地球物理学」の常識では、丸い地球は外側から順に①地殻②マントル (Mantle) ③外核 (Outer Core) ④内核 (Inner Core) で構成されている。そして

①一番外側の「地殻」は薄い皮で、その厚さは平均して十数km。

②その下のマントルは岩石の層で、深さ2900km付近まで続く。

③そこから深さ6300kmの地球の中心まで続くのが、「コア (核)」であり、これは鉄とニッケルの塊。コアはさらに、外核と内核の二層に分かれている。外核は軟らかく、温度差のために「対流運動」を繰り返している。

他方、地球は、一個の巨大な磁石。このため地球の磁場は、さまざまな現象を引き起こしている。そして、外核における「対流運動」がこの磁場を生み出しているということは、今や常識的な「科学的知見」らしい。

＜サイエンス・ファクション映画＞

この映画は、こんな科学的（物理学的）知識を前提とした「サイエンス・ファクション映画」だ。同じような映画に『アルマゲドン』（１９９８年）がある。これは、地球に衝突しようとする小惑星を爆破してその軌道をそらせることに、生命をかけるプロ集団の姿を描いたものだ。また『ディープ・インパクト』（１９９８年）も同じように、惑星の衝突による地球の滅亡を防ぐためのプロチームの活動を描いたものだ。まさに地球の危機を救う勇敢なプロフェッショナルたちの活動を描く「感動」の映画だ。

＜磁場の異常による恐ろしい現象＞

恐ろしい現象の第１は、心臓にペースメーカを取り付けた人たちの突然死。第２は、イギリスの首都ロンドンのトラファルガー広場で突然起った大量の鳩の異常行動。これにより、ショーウィンドウのガラスは割られ、車やビルはアツという間に被害を受け大パニックになった。そして同様の現象は、日本やオーストラリアでも起きていた。

＜天才たちの頭脳が頼り＞

２００２年には、日本でも久しぶりに田中耕一さんと小柴昌俊さんの２人がノーベル賞を受賞して沸いたが、さすがにアメリカの学問水準は高い。シカゴ大学で地球物理学を教えているジョシュ・キーズ（アーロン・エッカート）や地球物理学の大家コンラッド・ジムスキー博士（スタンリー・トゥッチ）らは、直ちに国防総省（ペンタゴン）に呼び出された。

＜原因と対策は・・・＞

ジョシュが異常現象を分析した結果、その原因は、何と「外核の回転が何らかの理由によって停止し、磁気に異常が発生した。そして地球の外核がその向きを東に変え、磁場が逆転し、それによって地球を覆う電磁界が消滅してしまっている」となった。そうだとすると、磁場のなくなった地球は太陽光線の直射にさらされ、すべてが焼き尽くされてしまう・・・。まさに地球の「消滅宣言」だ。

これに対する対策は、①地球の中心部まで、地下１８００マイルを潜ること。そして②外核で１０００メガトン級の核爆弾を爆発させ、その波動により再びコアを回転させること、だ。ただし、今まで人間は誰も地球の外核まで「潜入」したことはない。

＜多士済々のプロフェッショナルたち＞

この大冒険のため、バージル（地中探査艇）に乗り組む地球救出チームは、次の６名。

①まずリーダーは、シカゴ大学で地球物理学の教鞭をとるジョシュ。

②次にアメリカで最も高名な地球物理学者のコンラッド。彼は自分がリーダーになれな

かったことに不満を持ちつつ、世界のヒーローになることを夢見ている。

③コンラッドに自分の業績を盗まれた恨みを抱いているエドワード・ブラズルトン博士（デルロイ・リンド）は、バージルの開発者。

④ジョシュの友人サージ・レベック博士（チェッキー・カリョ）は、原子力兵器の専門家で、核弾頭の爆破担当だ。

⑤ロバート・アイバーソン（ブルース・グリーンウッド）船長はNASAのベテラン。

⑥紅一点のレベッカ・チャイルス（ヒラリー・スワンク）は、宇宙飛行士を目指して13歳のころからアカデミーに通う副操縦士。

他方、地上スタッフは次の3人。

①このプロジェクトの総指揮官は、国防総省（ペンタゴン）のトーマス將軍（リチャード・ジェンキンス）。

②NASAの管制塔を担当する優秀な飛行主任は、スティックリー（アルフレ・ウッドワード）。

③そして、天才ハッカーのセオドア・D・フィンチ（DJ・クオールズ）は、FBIのシステムにも侵入したことがあるという世界の寵児。プロジェクトの情報漏洩を防ぐために急遽呼び寄せられた。

地球の滅亡を救うため、彼らの「コア」への挑戦が今始まったのだ。

<冒険ドラマと人間ドラマ>

太平洋マリナ海域からバージルは「出発」した。「バージル」という名前はダンテの『神曲』に登場する「地獄への案内人」に由来しているとのこと。

「バージル」は、エドワード博士が20年の歳月をかけて完成させた地中探査艇。先端部分に超音波ドリルを搭載し、これによって岩石を砕きながら船体は猛スピードで進行する。それも地球のコアまで1800マイルの旅だ。

当然、その旅は思いもかけないハプニングに次々と襲われる。そのたびに智恵を絞り、工夫を重ねて、切り抜けるものの、次々と犠牲が・・・。

この冒険ドラマに実際にチャレンジするのは6人の乗組員。いくらその道の天才といっても、所詮みんな人間だから、当然そこにはさまざまな人間ドラマが展開される。そして、いくつも展開される冒険ドラマと人間ドラマを見ていると、ホロリとさせられてしまう場面も度々・・・。

<最後の結末は・・・>

この手の映画の結末は約束されている。すなわち、地球救出チームの献身的な努力により、地球は救われる。しかし、主人公もしくはそのチームの何名かは尊い犠牲になる、というものだ。これは『ディープ・インパクト』も『アルマゲドン』も同じで、それ以外の

つくり方はない。

この映画では、誰が犠牲になり、誰が生き残るのだろうか？それを考えながら、是非この映画を楽しんでもらいたい。

『K19』（2001年）では、放射能に被爆することを覚悟して、故障した原子炉の修繕に挑む原子力潜水艦乗組員の姿が涙を誘ったが、この映画でもノージルの修繕のため、耐熱温度が半分しかない防護服を着て、5000度という高熱の中に出ていこうとするエドワード博士の姿には思わず涙を誘われる。

今の平和な国ニッポンがあるのも、この映画のような多くの人たちの尊い犠牲のお蔭だと感謝しなければ、と思わずにはいられなかった。

2003（平成15）年6月9日記